

松 山 大 学 論 集  
第 23 卷 第 5 号 抜 刷  
2 0 1 1 年 12 月 発 行

ガーフィンケルとハイデッガー  
—— ドレイファスの解釈をてがかりとして ——

山 田 富 秋

# ガーフィンケルとハイデッガー

## —— ドレイファスの解釈をてがかりとして ——

山 田 富 秋

### はじめに

本稿の目的は、エスノメソドロジーの創始者であるガーフィンケルに対して、ハイデッガーの思想がどのような影響を与えたのかを明らかにすることである<sup>1)</sup>。シュッツのガーフィンケルに対する影響力の大きさはこれまで数多く指摘されてきたが、ハイデッガーの影響はほとんど言及されてこなかった。ところが、最近の Garfinkel (1996, 2002), Garfinkel, H. & D. L. Wieder (1992) の著作によって、実はかなり前からハイデッガーの影響がエスノメソドロジーの中に取り入れられていたことがわかるようになった。

ここでは特にガーフィンケルの「ハイデッガー的トラブルメーカー」という概念を『存在と時間』の道具的存在性の議論に照らしあわせ、両者の共通点と相違点を明らかにする。この議論の補助線として、ウイトゲンシュタイン的なハイデッガー解釈を先導するドレイファス (1991=2000a) の議論を援用する。それを通して、世界内存在の根本的特徴である気づかい (Sorge, caring) の概念がガーフィンケルにおいて、どのように変容したのかを示す。

### ハイデッガーへの着目

まず最初に、私がハイデッガーに着目するようになった理由を告白しなければならぬ。というのも、この発見は私のガーフィンケル解釈の誤りに端を発しているからである。つまり山田 (2011) でも指摘したように、Garfinkel, H.

& D. L. Wieder (1992) の解釈定理 (rendering theorem) の議論の中のチックカッコ { } の説明を、私が間違っただけで訳出したことが、ハイデッガーのガーフィンケルに対する影響に気づききっかけになった。

エスノメソドロジー研究者のあいだではよく知られている解釈定理とは、一般的な社会科学研究法を批判的に単純化したモデルとして考えるとわかりやすい。すなわち、社会科学者は社会で生起する現象を何らかの科学的方法を通して分析し、もともと生起した現象を科学的な分析用語に置き換え、こうして解釈した結果を研究成果として報告する。これが解釈定理である。ここで、もともと生起したままの現象をチックカッコ { } とし、科学的方法手続きを→、そして分析用語に変換した研究成果を丸カッコ ( ) と図示すると、解釈定理は { } → ( ) と表記される。

社会学者にとって解釈定理は、きわめてあたりまえの研究手続きにすぎないと思われるかもしれないが、そうではない。フッサールが『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』(1936=1980)において、現実に経験可能な生活世界を数学的理念性の世界にすり替えたガリレオの企図を「世界のガリレオ化」と呼んで批判したように、むしろ解釈定理は科学の土台となる生活世界を隠蔽する手続きなのである。したがって、現象学者は解釈定理によって隠蔽される以前の生活世界そのものに立ち返らなくてはならない。

エスノメソドロジストはフッサールの呼びかけに呼応して、→の分析手続きと丸カッコの指示する(分析結果)を捨て、( )に変換される以前のチックカッコの {生きられた現象} へと向かう。そしてそれが組織される、その独特の様式、つまり「個性原理」を記述しようとするのである。ガーフィンケルの言い方にならえば、パーソンズに代表される構築的 (constructive)<sup>2)</sup> 社会分析は、メンバーの方法を通してアクセスできた「生きられた」社会現象を、科学的方法手続きを通して、科学的研究成果に置き換える。それによって、生きられた現象は隠蔽され、廃棄されてしまうのである。これとは対照的に、エスノメソドロジーは、例えば {高速道路の渋滞} といった現象を、まさにその現

象に固有の個性原理を記述するという方法によって、いわば直接捉える。したがって、エスノメソドロジーと構築的分析とは互いに共約不可能な研究なのである。

これで私の訳出の間違いを説明する準備ができた。チックカッコ { } の定義は、the locally produced, naturally accountable lived phenomenon of order\* (Garfinkel, H., and D. L. Wieder 1992, p. 187) であり、それを私は「ローカルな場面において産出された、自然に説明可能な、生きられた秩序性としての秩序現象」(山田, 2001, 74 頁)と訳出した。そしてチックカッコとしてガーフィンケルの挙げる例は {高速道路の車の波} や {電話が私にかかっている} などである。例えば、私たちの日常世界の経験に照らせば、ある状況において、あるタイミングでかかってきた電話について、{電話が私にかかっている}と経験することがある。ところが、これを構築的分析にかけ、私にかかっているように聞こえた呼び鈴を何度録音して分析しても、音波として録音された呼び鈴は、どれも同じ音波として分析されるほかはない。それでは、ある状況において、ちょうど適的なタイミングで鳴り、私にかかっているように聞こえる電話の呼び鈴という現象を、隠蔽したり廃棄したりせずに研究するにはどうしたらいいのだろうか。

ここで構築的な呼び鈴の録音と音波の分析は→に当たるだろう。同じ音として分析された構築的分析の結果は(同一の音波)となる。これと対照的に { } は、the lived equipmentally affiliated in vivo in-courseness of the work that is being spoken of (Garfinkel, H., and D. L. Wieder 1992, p. 187) である。私はこの文章を「いま語られているワークの生きられた身体を通した、ある技術(能力)と結びついた進行過程」(山田, 2001, 78 頁)と訳した。ところがこの時点では、ここで equipmentally affiliated という表現について、equipment をその直訳である道具ではなく、何らかの技術や能力としてしか理解できていなかった。

その後、ロールズの編集した Garfinkel (2002) の出版によって、equipmentally affiliated は「道具と結びついた」と訳す方が適切であることに気づいた。なぜ

ならここで言う道具とは、紙やペン、さらには、車などの機械やコンピュータなど、人間がある状況において何らかの目的を遂行する媒介物としての道具を意味していることがわかったからである。そしてガーフィンケルは、まさにハイデッガーの道具性の議論を踏まえて、これらの道具と結びついた仕事場に特有のワーク（shop floor work）に言及していたのである<sup>3)</sup>この点をさらに論究していくために Garfinkel（2002）の中に出てくる「ハイデッガー的のトラブルメーカー」の概念を検討しよう。

### 道具使用の透明性とハイデッガー的のトラブルメーカー

アン・ロールズが編集した Garfinkel（2002）において、「道具と結びついた」仕事場に特有のワークである協働的な技術は、障害や病気をハイデッガー的に利用することによってエスノメソドロジ的に再特定化できると述べられている。障害や病気をハイデッガー的に利用するとはどのようなことだろうか。ガーフィンケルは障害や病気に続けて、障害者の自立生活と道具的に結びついた障害サポート器具の他に、視野を上下左右逆転させる逆転メガネ等々の「トラブルメーカー」を挙げ、その後の第6章において、逆転メガネと先天性夜盲症、さらに盲人の例を詳細に検討している（Garfinkel, 2002, pp. 125-126. & Ch. 6）<sup>4)</sup>。彼がこれらのトラブルメーカーを導入する理由は、日常的な道具使用の透明性（transparency）を克服することによって、ローカルなワークの社会的組織化の細部を明らかにするためである。つまりトラブルメーカーとは、道具使用の透明性を克服するための一手段として考えられているのである。

ここですぐにハイデッガー的のトラブルメーカーの概念の説明と具体例に入る前に、まず道具使用の透明性という考え方をハイデッガーの『存在と時間』に即して説明する必要がある。なぜなら、ガーフィンケルの道具性（正確には「道具と結びついた」ワーク）は、かなりの程度ハイデッガーの道具性（Zuhandenheit）の議論を踏まえていると考えられるからだ。しかし、ガーフィンケルが道具使用の透明性を克服するために何らかのトラブルメーカーを導入すると言う時、

ハイデッガーの道具性の議論と微妙にずれてくる。それは後に指摘するように、ハイデッガーの配慮 (Besorgen) と顧慮 (Fürsorge) の区別を、ガーフィンケルは等閑視しているように見えるからである。この点を説明するためには、少し長くなるが、ハイデッガーの道具性の考え方について、ドレイファスのハイデッガー解釈を導きの糸として紹介することにしよう。

### ドレイファスのハイデッガー解釈

ハイデッガーの『存在と時間』に関する哲学研究の歴史は長い。またこれに関する専門的議論は多岐にわたっているため、それらを網羅的に追うことは専門外の者には不可能に近い。したがって私は、エスノメソドロジーに比較的親近感のあるウイトゲンシュタインの言語哲学に近いハイデッガー解釈を、彼の道具性の議論の手がかりとすることにした。それは『存在と時間』のドレイファス (Dreyfus, H. L., 1991=2000a) による注解と、この注解の邦訳者である門脇俊介の諸著作である<sup>5)</sup>

ドレイファスも、ハイデッガーの世界内存在の社会学的研究として Garfinkel の仕事に言及するだけでなく、道具性についても道具の使用中の透明性 (transparency) と表現しており、ガーフィンケルと同じ用語法を使っていることがわかった。彼の注釈によれば、私たちが道具を使用するとき、道具は端的に消える。ドレイファスは盲人の白杖を例にして道具の透明性を説明している。つまりそれを白杖として使用していない時には、その白杖の表面が滑らかである等々のさまざまな特徴を言うことができるが、実際にそれを使用したとたん白杖の存在は消え、それを使っていつものように意のままに歩くことしか残らない。ドレイファスはこれを道具使用の透明性 (transparency) と呼ぶ (Dreyfus, H. L., 1991, pp. 64-69.)。またこの時、道具だけでなく使用者も消えるという。つまり道具を使用している現存在 (Dasein 当該状況に生きる具体的な人) には当の道具についてのテーマ的意識も意図性もなく、ただ状況に没入しているのである。さて、この議論の全体的文脈を理解するためには、ハイ

デッガーの『存在と時間』の第1部の全体について概略を示すが必要になる。次にその作業に入っていく。

### 『存在と時間』の三つの存在論的カテゴリー

門脇（2008）によれば『存在と時間』には三つの主要な存在論的カテゴリーがあるという。それは現存在（Dasein）と事物的存在性（Vorhandenheit）と道具的存在性（Zuhandenheit）である。まず現存在とは、具体的でローカルなコンテクストに日常的に住まっている、つまり状況内で生きる具体的な人を意味する。そして事物的存在性とは、古典的な「実体」カテゴリーに対応する存在である。つまり、ガーフィンケルの言い方にならえば、構築的分析や形式的分析が実体視するさまざまな現象のことを意味するだろう。最後の道具的存在性とは、何らかの仕事に従事し何らかの道具を使用する世界に没入したふるまい全体を意味する。そしてガーフィンケルが「道具と結びついた（equipmentally affiliated）」と道具使用の透明性という表現で意味しようとしたことは、さしあたり、この道具的存在性に直接関係していると見てかまわないだろう。ここでハイデッガーの道具性に関する議論をかいつまんで紹介しよう。

まずガーフィンケルの個性原理の記述要請と非常に類似した要請が『存在と時間』の第1部第3章第15節「環境世界のなかで出会う存在者の存在」において述べられている。それは、私たちが日常的に出会う存在者（もの）の存在を現象学的に明らかにするためには「ものを操作し使用する」（H. s. 67）という配慮的な交渉の中で、どのように存在者が現れるのかを明らかにしなければならないという。それは存在者の存在構造を規定することであり、いつもすでに「生き生きと」働いている存在了解を、取り立ててあからさまに遂行することにはほかならないという。個性原理を記述するためには、ワークの進行過程に入り込み、メンバーのコンピタンスを獲得しなければならないとガーフィンケルが言うように、ハイデッガーもまた、あたかもガーフィンケルの要請に呼応するように、いま働いている存在了解を明らかにするには、常にすでになされ

ている配慮的交渉の中に身を移す必要があると言う。

現象学的に予備主題となる存在者は、ここでは、使用中のものとか製作中のものであって、それらに接するためには、かような配慮のなかへ身を移してみなくてはならない。厳密に言えば、身を移してみるという言い方にも語弊がある。なぜなら、われわれはこのような配慮的交渉というありかたへ、あらためて身を移すまでもない。日常的現存在は、いつもすでにこのありさまで存在しているのである。たとえば、ドアを開ける時、私は把手を使用している。したがって、このように出会う存在者へと近づく現象学的通路を獲得するということは、むしろ、そこに押しかけ付きまわってきて、かような「配慮」の現象をまったく蔽いかくしてしまう解釈傾向を、排除するという点に存するのである。(H. s. 68 細谷訳 159-160 頁)

解釈定理によって「生きられた現象」を隠蔽し廃棄する構築的分析をガーフィンケルが批判したのと同じように、ハイデッガーもまた上の引用文において、存在者との配慮的交渉を隠蔽する理論的な解釈を厳しく批判する。そして配慮において出会う存在者は道具 (Zeug, equipment) であり、道具の存在様相、つまり、道具がまさにその道具であるのは、ひとまとまりの道具立て全体において、その道具が「何々するためにある」という構造に位置づけられ、他の道具との多様な指示関係において、そして後でふれるように、それを超えた全体的な文脈、つまり規範的な社会的慣習の中に位置づけられているからであるという。そして道具がその存在においてありのままに現れるのは、その道具を使うという配慮的交渉においてのみである。その時、道具は主題的に把握されるわけではなく、道具の実践的な使用と一体化しているのである。もし私たちが事物をただ理論的に眺めたとしたら、この道具的存在性を理解することはできないだろう。しかし実際に道具を使い操作すると、私たちの道具使用を指導する配視 (Umsicht) が常に働いていることがわかる<sup>6)</sup>。

## 事物的存在性との闘いとしての『存在と時間』

ドレイファスが強調したように、道具的存在性のハイデッガーによる発見をもとにして、『存在と時間』の哲学的企図について推測することができる。すなわち門脇（2008, 51頁）によれば『存在と時間』の叙述の全体は、現存在が事物的存在性の概念によっては決して捉えられないことを立証する企図だと言う。つまり、通常の実証主義的世界認識がモデルとする、世界を客観として認識する存在様式は、実は日常的な世界内存在の例外状態であり、むしろ世界内存在の働きが停止してしまった故障状態となる。われわれの日常の多くは、配慮の気遣いの様態で営まれているのに、従来の哲学や科学は、そうした正常な日常の様態にとっては例外的な状態と、そこで見いだされる理論装置にわざわざ置き戻して世界内存在を理解しようとしてきたのである（前掲書, 64頁）。

そしてこのような世界内存在の欠損状態にあっては、心、物そして心のうちにおいて物を映す表象のすべてが、事物的存在性という様式を帯びる。心は物を映す表象を内蔵する容器のようなものとみなされ、現存在の存在了解が含む、自らの存在への多様な態度の取り方などが忘却されてしまい、物は世界了解において経験されている文化的・制度的環境の相貌を失い、世界についての情報が観念や命題の形をとって、表象として心の容器に収められるようになるという（前掲書, 65頁）。まさにライルとも通じる根本的な表象主義批判である<sup>7)</sup>。

ここで道具的存在性（Zuhandenheit）の概念についてさらに詳しく論じながら、ドレイファスが開いた新しいハイデッガー解釈のもたらす意義を考えたい。門脇（2008, 74頁以降）は道具の透明性を以下のように要約している。つまり(1)道具の全体論的性格：道具は、それが向けられている目的（手段性）への関連性のうちのみ道具としての意味を持って現れてくる。(2)道具は実践的な交渉と道具への参与を通してのみ出現する。それは「know-how」という実践知＝配視であり、理論的観照には現れない。(3)目立たないことこそが、道具を道具たらしめている。

門脇（2010，80頁以降）は道具の透明性を「技能的透明性」とも言い換え、私たちが道具を使うときの技能的なふるまいにおいては、その道具が目立たずに使われており、まさに、こうして目立たない透明な仕方で行われるからこそ道具であるとする。道具が道具らしさを発揮するのは、道具が「私と私の仕事を透明な仕方につなぐ媒体に変身する」（81頁）ときである。逆に透明に使用されることをやめた瞬間、道具であることをやめてしまう。ここにガーフィンケルのハイデッガー的トラブルを解明するヒントがあると思われるが、それは後ほど問題にしよう。

さらに門脇（2010，82頁以降）は、道具の全体論的性格を「存在論的透明性」と名づけ、これが最も重要であると指摘する。つまり、道具は仕事場や文化のようなローカルな状況全体（ハイデッガーでは「世界」）の内部でのみ意味を持つ。そして世界あるいはローカルな状況全体の例として、日本語の文化圏やローカルな大学生活、あるいは日本型会社社会を挙げ「そのうちで人間の行動様式と環境とが相互に依存しあっているような、独自の社会のまとまり」（83-84頁）を指すという。そして道具の技能的透明性は存在論的透明性に裏打ちされているのである。「透明性が道具に存在論的に属しているだけでなく、道具の出現の背景となっている状況全体・世界もまた、目立たない仕方で行われていなければならない」（84頁）。

門脇によればドレイファスの最大の貢献とは、この『存在と時間』第1部の道具的存在性を軸にハイデッガー哲学を「技能の現象学」として再構成したことであるという。すなわち、私たちの日常生活を占める習慣的な行為や道具使用は、これまで見てきたように、意識された心的表象を伴わない没入的な志向性であり、ハイデッガーは配視という没入的な志向性の持つ技能的な「いかになるかの知 (know-how)」を扱う技能の現象学を展開したと言える（門脇，2010，223-224頁）。ドレイファスがエスノメソドロジーを社会学における技能の現象学の応用と考えた理由もこれで理解できるようになる。そして以下の門脇からの引用が示すように、この視点は後期ウィトゲンシュタインにかなり近い。

(前略) このような背景は一定の社会において、人々相互のあいだでの振る舞いの一致として密かに織り合わされ、個々の志向的ふるまいを可能にしているものであって、このような親密で背景的な「慣習的振る舞い (practice)」こそが「世界を開示すること」そのものであり、ハイデガーの「存在了解」の別名にはかならないのだとドレイファスは主張する。あらゆることがらの理解可能性を、ふるまいの一致、あるいは生活形式の一致に求めてそれ以上の哲学的基礎づけを拒む、後期ウイトゲンシュタインの発想が、明らかにここでは念頭に置かれている (門脇, 2010, 224 頁)。

### 道具的存在性の透明性の克服

ここでガーフィンケルの最初の課題にもどろう。彼は日常的な道具使用の透明性を克服するために病気や障害などのハイデッガー的なトラブルメーカーを導入し、それによって、ローカルなワークの社会的組織化の細部を明らかにしようとしていた。それではハイデッガーにとって、この同じ課題はどのようにして遂行されるのだろうか。門脇 (2008) によれば、それは「世界の閃き (Aufleuchtung der Welt)」によってである。そして透明性を克服した結果として示されるのは、道具の置かれたコンテキストにおける全体関連性である。

この「世界の閃き」をもたらすものは、表面的にはガーフィンケルの言うハイデッガー的なトラブルメーカーに非常に近い。すなわち、それは実践的な交渉において目立たずに、しかし正常に機能していた道具が、突然利用不可能になったときに現れるという。門脇 (2008, 79 頁以降) は次の3種類の利用不可能性について説明する。それは(ア)道具が故障等によって目立つ。(イ)適切な道具が手元にない時に、当該の不在の道具はその必要性を「押しつけがましさ」をもって迫ってくる。(ウ)道具の全体的指示連関を乱す場違いなものが出現して手向かう。この3ケースである。

確かにガーフィンケルもハイデッガーも、これまで正常に機能していたもの

が利用できなくなったモメントに着目している。ところが、ハイデッガーがあくまでも世界内の存在者、つまり物（もの）＝道具について考察しているのに対して、ガーフィンケルは病気や障害をもった人、つまりハイデッガーの用語では現存在（Dasein）について考察しているのである。この点は後でみるように、両者を分かつ根本的な違いに発展していけよう。しかし道具使用の透明性を克服した結果、明らかになる事態については、ある程度の共通性を認めることができる。

というのも道具の技能的透明性は世界の存在論的透明性に裏打ちされている以上、道具の利用不可能性によって開示される「世界の閃き」は、道具の総計ではなく、むしろ道具使用の暗黙の背景を成す規範的な社会的慣習（practice）を明らかにするからである。つまり「この規範性は、個々の主観によって与えられた価値の集まりであるよりは、局所的コンテキストや使用の場を基礎として出現し、局所的コンテキストの内部にいる人びとの全体に共有されているふるまいの方向性のようなものである」（門脇，2008，86頁）。この引用の「局所的コンテキストの内部にいる人びと」をガーフィンケルの local cohort（局所的に配置された人員）と読み替えれば、ハイデッガー的なトラブルメーカーによって明らかにされるのは、まさにローカルな場面における社会的慣習と言うこともできるだろう。

ここで道具使用の透明性を克服することによって明らかになることを、ガーフィンケルから直接引用して示そう。

With these “troublemakers”, work’s incarnate social organizational details are revealed by overcoming their transparency in their topically ordinary concerted recurrences of ongoingly developing phenomenal fields of ordered details of generality, uniformity, interchangeable populations, and the rest, i. e., in ordered details of structures. Garfinkel, H.(2002, p. 126)

この引用から、透明性の克服によって明らかになることとは、状況に受肉化された社会的組織化の詳細であり、それは言い換えれば、普遍性、画一性、交換可能な人員から成る秩序化された今展開中の現象野において、トピックとしてありふれた協働的な現象の再現における秩序化された詳細である。確かにこれを規範的な社会的慣習（practice）の詳細な秩序化された構造と同義であると解釈すれば、ハイデッガーの意味するところとほぼ同じであるという結論が導かれるかもしれない。しかし、少なくともこの引用に即せば、ガーフィンケルは、繰り返し再現可能な秩序性への志向性が強く読み取れる。この点についての再検討は、ガーフィンケルの具体的な分析例まで待つことにしよう。

### 気遣い（Sorge）への統一的把握

ハイデッガーとガーフィンケルの共通性を見たので、今度は、両者の違いについて論究していこう。一番大きな違いは、すでに示唆したように、気遣いという現存在の根本的活動には、Besorgen（配慮）という道具を介して実践的に交渉する配慮的気遣いの位相とは別に、Fürsorge（顧慮）という他の人格（現存在）をそれ自身として気遣う位相との二つの位相がある点である。しかしガーフィンケルは、道具的交渉の位相である配慮つまり配視だけしか問題にしてこなかった。ハイデッガーから直接引用すると、

H. s. 121；さきにわれわれは、世界の内部にある道具的なものごとの配視的交渉を、先廻りして配慮という名称で記述したのであるが、世界内存在にとっては共同現存在も、やはり実存論的に構成的な意義をもつものであるから、これも前述の配慮と同様に、やがて現存在一般の存在が気遣いとして規定されることを考慮して、この関心の現象にもとづいて解釈されなければならないわけである。共同存在という存在様相も世界の内部で出会う存在者に関わり合う存在であるという点では、配慮と同様であるが、配慮という存在性格は、共同存在にはそぐわない。現存在が共同存在という

ありさまで関わり合う存在者は、用に具わる道具という存在様式をもたない。それは、それ自身、現存在なのである。この存在者は、配慮されるのではなく、待遇されるのである。(細谷貞雄訳を参考に用語統一して改訳した)

それでは、なぜ現存在＝人と存在者＝「もの」に対する気遣いを分ける必要があるのだろうか。門脇(2008)によれば「ハイデッガーは当初、現存在の前理論的な日常的な存在了解を、そこで現存在の存在論的構造を取り出すことができる、中立的で無差別的な理論的な基盤だと考えていた」(106-107頁)という。つまり道具的存在性をそのまま論理的に敷衍すれば、現存在の存在論的構造を明らかにできると考えていたようだ。ところが『存在と時間』を論述していく過程で「この日常性が同時に、自らを世界のうちに喪失している現存在の非本来的な様態である」(107頁)ことがわかってきたという。そして、日常性が非本来的性でもあるという論点は、道具的存在者に注目するだけでは現れてこないのである。

ここで道具的存在者への配慮とは異なる、他の現存在に対する気遣い、つまり顧慮における共同存在の様式とは何かについて論じなければならない。道具使用においては、常にすでに働いている透明性と配視が、Benner, P. & J., Wrubel (1989)の表現を借りれば、身体にねざした知性(embodied intelligence)として明らかにされたが、顧慮においては平均化され匿名化された世人(das Man)の支配が明らかになる。それは他者の他者性の平板化をもたらし、現存在を世人自己(非本来的自己)へと頹落させる原因となるものであるという。

ハイデッガーが描く日常的な他者把握は、道具的存在性とは反対に非常にネガティブなものである。つまり現存在が日常的に他の現存在を認める仕方は「ただわずかに頭数として取り扱う」(H. s. 125, 細谷訳, 274頁)だけであり、

このように「省視(Rücksicht＝他者への顧慮)のない」無遠慮な共同存

在は、ほかの人びとを「勘定に入れる」けれども、実は彼らを「物の数とも思わず」、彼らとまじめに関わり合おうともしていないのである。(ibid.)

なぜこのような「存在様相」が出現するのかと言えば、それは「現存在は日常的相互存在としては、ほかの人びとの司令下にあるということの意味する」(H. s. 126, 細谷訳)からである。つまり「現存在がみずから存在しているのではなく、ほかの人びとが彼から存在を取りあげてしまったのである。ほかの人びとの思惑が、現存在のさまざまな日常的存在様式を操っている」(ibid.)。そして現存在を日常的に支配する、この「ほかの人びと」とは「特にだれということもできない中性的な」das Man (世人, 世間)なのである。

ハイデッガーは世人によって支配された日常的な社交生活を、疎隔性、平均性、均等化、公開性、存在免責、迎合といったネガティブな特徴を列挙して説明する。ここではこれらの特徴を逐一説明する紙幅はないが、例えば存在免責とは「(前略)だれでもきまって、それは世間の仕業だったと言うが、また、それをしたのは、だれのせいでもない、とも言うことができる」(H. s. 127)ことを指す。つまり、匿名化された世人の判断に身を委ねることによって、自分自身で考えて行動し自分で責任を取ることを免れる事態である。こうして、

さしあたって「存在している」のは、自分の自己という意味での「私」ではなく、世人というありさまで存在しているほかの人びとなのである。私というものは、さしあたってこの世人から、かつ世人として、私に「与え」られるのである。さしあたっては、現存在は世人であり、そしてたいていはそのままなのである。(H. s. 129, 細谷訳を参照し、用語を本論文と統一した。)

## ドレイファスのハイデッガー解釈の限界

ハイデッガーの道具的存在性にウイトゲンシュタインとの共通性を見いだしたドレイファスは、この世人の概念をどのように解釈したのだろうか。彼は単一の共有された公共的世界が存在することを世人のおかげであるとしながらも、ハイデッガーが世人に順応主義の危険性を読み取り、それに対して警告するとともに大衆批判にどんどん傾いてしまうことを非常に残念だと述べる。そしてハイデッガーを正しく評価するためには、世人の肯定的はたらきと否定的はたらきを区別しなければならないと主張する（Dreyfus, 1991, pp. 154-158, 邦訳 175-179 頁）。

世人の否定的はたらきに関するハイデッガーのトーンの強さにもかかわらず、ドレイファスは世人の肯定的機能として、世界の理解可能性が公共的規範に同調しようとする現存在の傾向から帰結し、それが日常的了解の基盤となることを指摘する。そうすると、ハイデッガーとウイトゲンシュタインの両者にとって、世界の理解可能性の源泉は平均的な公共的振る舞いであるということになる。ところがウイトゲンシュタインとは反対に、ハイデッガーは日常的理解可能性が、隠蔽された「真正の」明白性を代償に得られた偽の明白性であると考える。（H. s. 127 「公開性（公共性）はすべてを曇らせ、しかもこうして蔽われたものを、なにか周知のもの、万人に供されたものと公称するのである」細谷訳。）

そこでドレイファスは問う。「しかしハイデッガーはなぜ、日常生活においては理解可能性が曇らされていると述べて、どんな理解可能性であれ一切の物事が理解可能性を得るのは公共的な実践においてなのだ、と述べないのだろうか。より高次の理解可能性が存在するのだろうか」（ドレイファス邦訳, 2000 a, 178 頁）と疑問を發する。確かに理解可能性に真と偽を設けると、それは世界の究極的根拠を終わりなく求め続ける基礎づけ主義に陥ってしまう。こうして彼は哲学的伝統がいつも求めてきた、より深い理解可能性を退け、共有さ

れた振る舞いが理解可能性の「究極の」根拠であることを繰り返し主張するのである。

しかしながら、このドレイファスの議論は、はたしてハイデッガーの言わんとするところを的確に把握しているのだろうか。否である。ドレイファスはこの約10年後に『世界内存在』の邦訳(2000a)序文<sup>8)</sup>の冒頭において自己の誤りを認めている。(序文17-18頁)すなわち、公共性は世界解釈を規制しており、つねに正しいと認められていると言う時のハイデッガーの皮肉を彼は理解することができず、このことばをそのまま、理解可能性の源泉は世人の特徴の一つである、日常言語のうちで分節化される平均的で公共的な振る舞いであると結論したことを誤りと認めたのである。「私は、通常の行為の仕方によって端的に可能になる理解可能性よりも、より高次の理解可能性があることを否定していた点で、間違えていたのであった」(邦訳序文24頁)。

ではドレイファスはどのようにして、この間違いを訂正したのだろうか。それはハイデッガーが『存在と時間』の第2部において展開した「決意した現存在」を積極的に認めることによってである。すなわち、日常性を生きる現存在は世人のうちに吸収され隠蔽されているが「決意した個人は、月並みで平均的で公共的な標準から逸脱して、自発的に個別的な状況に応答する」(邦訳序文、23頁)という。ドレイファスはアリストテレスの「フロネーシス(実践的知恵)」概念を援用し、このフロネーシスの最終的習得段階に至ることが、決意した現存在の様態に近いという。つまり、適切な時に適切なことを適切なやり方で即刻実行できるフロネーシスを持った現存在が決意した個人となる。

しかしながら、本稿の最後の Goode, D.(1994)の研究から導きだされるように、世人の類型的で匿名的な特徴をシュッツの現象学的視点から再考し、それが克服される過程を具体的なフィールドワークの経験に照らして考えれば、わざわざフロネーシスの概念を持ち出さなくても、ハイデッガーの世人と「決意した現存在」の関係は、非常によく理解できるようになる。つまり、桜井厚(2002)が調査の必須の行程として提示した「自己を調査の道具とする」こと

によって、日常的存在様式の特徴である匿名性と類型性によって隠蔽された現存在を、世人との一体化から引き離し、明るみに出すことができるのである。その点では、世人をウィトゲンシュタイン的な公共的振る舞いに強引に結びつけようとしたドレイファスの限界がここに露呈したと考えられる。

### エスノメソドロジー的フィールドワークの可能性を開く

ここでもう一度ガーフィンケルのハイデッガー的トラブルメーカーの議論にもどることにしよう。というのも、このトラブルメーカーによって明らかにされるエスノメソドロジーの具体的な研究について、まだ一度も触れてこなかったからだ。まず、ガーフィンケルの研究は、トラブルメーカーとして逆転メガネを使用する研究の他に、夜盲症や盲人の道具使用の世界の研究がある。逆転メガネ実験については彼の大学院生であったロビラードが以下のように雄弁に語っている (Robillard, A., 1999, p. 155)。

私 (ロビラード) が UCLA の大学院生だったころ、ハロルド・ガーフィンケル—エスノメソドロジーの創始者—のもとで学んだ。彼はフランスの現象学者、モーリス・メルロ＝ポンティに強く影響されていた。この哲学者は、日常的課題がいかに身体的な達成であるかについて系統立てて説明した。そのような身体的達成を例証するために、ガーフィンケルは学生たちに逆転メガネを作らせた。溶接用のマスクに装着されたレンズは、すべてのものの上下、左右を逆にした。ガーフィンケルは私たちに、それをよく見ながら、黒板に名前をかかせた。しかしわれわれはそれができないことに気づいた。われわれの手書きはあらゆる点でうまくいかなかった。逆転メガネは、手がどこにあるのかについての通常の知覚を許さず、また、手が動く際の方向とその視覚的モニタリングを不可能にした。もしわれわれが目を閉じれば、判読できる名前を書くことができた。しかし、われわれが視覚を用いると、手書きの文字は混乱したものになり、しばしば手と

腕の瞬間的な麻痺を引き起こした。この実習の目的は、文字を書くというような日常的課題が「正常な」視覚という習慣に基礎をもっていることを明らかにすることであった<sup>9)</sup>。

そして先天性夜盲症というトラブルメーカーの研究例は、夜のパーティに自宅にお客を呼ぶ時に、入ってきた客たちに決して台所をさわらないようにとお願いする夜盲症のある女性の研究例である。なぜ彼女がそんなお願いをするのかと言えば、彼女の台所は目が見えなくてもフライパンや鍋などの調理器具と食材とを自由に操れるように適切に配置されている。ところが、晴眼者が少しでもこの配置を変えてしまうと、彼女はもはや台所を意のままに操ることができなくなってしまうからである。ガーフィンケルが挙げる例は、パーティに来た客が勝手に台所からコップを取り出して飲み物を飲み、それを特に意図もなくシンクに置いたとしたら、それを知らないで戻ってきた彼女は、すでにシンクにコップが置いてあることを知らずに、またコップをその上に置いて、前からあるコップを割ってしまうかもしれないというものである (Garfinkel, 2002, pp. 212-214)。

逆転メガネと夜盲症の例を考えると、ガーフィンケルが言うハイデッガー的トラブルメーカーとは、確かに道具的存在性の透明性を克服する手段としては有効に働いていると言えよう。しかしながら、そこで明らかにされるものは、逆転メガネの場合であれば、手で文字を書く時に私たちがいかに通常の無意識的で習慣的な身体動作（身体図式）に依存しているかということであり、夜盲症の場合には、彼女が例えば台所のようなワンセットの道具の全体的指示連関を、具体的な状況に適合的に工夫して配置しているということであった。ハイデッガーの配慮と顧慮の区別をここに適応すれば、どちらの例も道具的存在者つまり「もの」に対する配慮であり、他の現存在に対する顧慮には当てはまらない。この点だけを根拠に早急に結論をくだせば、エスノメソドロジーはドレイファスと同じように、道具的存在性だけを扱おうとしているように見え

る。ところが実際はそうではない。

すなわち、ハイデッガー的トラブルメーカーである病と障害を研究テーマとしたエスノメソドロジーの研究、つまり Goode (1994) と Robillard (1999) の研究を検討すれば、それらが他の現存在に対する顧慮のはたらきも視野に収めていることがわかる。グッドやロビラード自身はハイデッガーの哲学用語こそ用いていないが、フィールドワークにおける自分自身の時間的な変容過程を分析の俎上に上げることによって、ハイデッガーの言う世人の匿名性と平均性を克服し、まさに現存在のエスノグラフィーを遂行していると考えられる。ここでは Goode (1994) の研究を取りあげて、このことを例証していきたい。

グッドが研究対象としたのは、風疹症候群に起因する先天性ろう盲と知的障害のある二人の女の子、クリスティーナ（クリス）とピアンカである。ここではクリスについて研究を開始した当初にグッドが行った調査の自己点検（self-examination, p. 24）を取りあげて、ハイデッガーの世人の観点から再解釈してみよう（Goode, 1994, Ch. 2）。彼は「アヴェロン野生児」を教育したイタールとは反対に、自ら進んでこの野生児の自然な住処であった「森に入って」いくこと、つまり、クリスという子どもの視点からものごとを理解することを決断した（Goode, 1994, pp. 23-24）。

クリスは複合的な障害を抱えており、それがどれほど重度なのかを医学的に測定することは不可能に近く、彼女が収容されていた重度障害者施設において、日常的に接するケアスタッフは除いて、医師などの専門的スタッフはクリスの障害がほとんど改善の見込みはないばかりでなく、彼女は自分の考えさえも持っていないと決めつけていた。グッドは彼女に対するスタッフの更正的な処遇によって、彼女自身が持っている技能が隠蔽されているのではないかと検討をつけた。ところが、彼女の世界を「彼女自身の見方」から理解しようとすると、つまり、クリスとのあいだに間主観性を達成しようとすると、そのことに対する最大の障壁は自分自身だということがわかってきたという。

そこで、彼は自分自身を点検すること（自己点検）を最初の大きな課題とする。つまりクリスとの日常的関わりを検討する作業は、桜井（2002）の「自己を調査の道具とする」のと全く同じように、調査者である自分自身を検討する作業になる。こうしてグッドは(ア)日常生活で、ろう盲であることをまねてみる(イ)夢分析の本格的な訓練を受ける(ウ)クリスについての自分自身の記述を批判的に考察する、という3つの作業を行った。それではなぜ彼はクリスの世界の理解にとって、自分が最大の障壁であり、自己点検が必要だと感じたのだろうか。それは端的に言えば、クリスの普通の行動がグッドにとっては想像できないか、あるいはそのままでは「普通ではない」つまり「異常」に見えてしまうからだ。

例えば(ア)ろう盲であることを耳栓と目隠しを使って再現してみたが、これまでの見えて聞こえる経験の蓄積があるために、生まれた時からろう盲である経験を疑似体験しようとしても、それが不可能であることがわかったという。しかしこの擬似的な障害体験がまったく役に立たなかったわけではなく、自宅での実験で、いつもの簡単なことが達成できずにいらいらしたり、自分のまわりの家具や家人などにぶつかることで、周囲の物体や自分自身の潜在的な危険性に気づいたりすることになったという。

そして(イ)夢分析はハイデッガーの世人を考える上できわめて示唆的である。つまり、彼が繰り返し見た夢のひとつに「月にアリスをぼーん」と名づけた夢がある。それはグッドが暗い空の遠くに小さな光点を見る。大きな「奏でるような」音がどんどん大きくなっていくとともに、この小さな光点も大きくなり始める。ある時点で、その光点は、標的の中のクリスの顔の白黒の絵として見えてくる。その顔が信じられないくらいに大きくなり、視野いっぱい広がる。音楽が耐えられないほどに大きくなる。グッドは不安と怒りで耐えられなくなり、その顔を手のひらで打つ。するとその顔は暗い空に戻って行き、音楽は静まり、普通はそこで目覚めるというものである。グッドはこの夢を次のように分析した。「私はしばらくして、これらの夢がクリスに対する私の感情

的自己の二つの別々の反応を表していることを理解するようになった。私の一部（共感と思いやり）は、クリスを救い、彼女を私自身と同じようにしたいと望んでいた。別の一部（恐れ、憎しみ、そしておそらく同情）は文字通り彼女を地上から放逐したいと望んでいた」（p.27）。

そして⑵の「記述の批判的考察」とは、フィールドノートの中でクリスの行動を記述する時に「逸脱した」あるいは「異常」等々のマイナスの評価で記述することを避けられないという問題である。その理由とは、彼が健常者として社会化されてきた以上、健常者の知覚を暗黙の裡に正常とする「知覚の泡」に呪縛されてしまい、そうになってしまうからである。グッドはクリス自身の世界を理解するためには、この泡を破ることが必要だと気づく。

ハイデッガーによれば、私たちが日常生活において他の現存在と出会う形式とは、自らを世界のうちに喪失している現存在の非本来的な様態である。そしてこのことは社会学の調査者にもあてはまる。つまりグッドがクリスとのあいだで間主観性を達成しようとした時に立ちはだかったものは、匿名的で平均化された類型的（シュッツ）世人に支配された調査者である自分である。グッドは自己点検を遂行することによって、世人の支配を克服しようとしたと解釈できる。すなわち、人工的な疑似障害体験は健常者としての日常的身体感覚を相対化することに貢献し、夢分析はクリスを救いたい、あるいは逆に放逐したいという健常者である自分に自然に生起する強い感情を分析の俎上に載せることになり、そして「知覚の泡」を破ることによって健常者の評価的見方を自己言及的に気づくようになる。つまり、グッドが自己点検として実践したことは、調査者である自己を世人の支配から逃してやることによって、クリスとの共同存在性を達成することである<sup>10)</sup>

ここで自己点検という用語でグッドが行った作業は、ハイデッガーが本来的存在の開示に不可欠である「蔽塞や不明化の一掃」や「歪曲の打破」という仕事と基本的に同じであると思われる。つまり「現存在が世界を自分の眼で発見し熟察したり、また現存在が自己の本来的存在をおのれ自身に開示しようとす

るときには、このような「世界」の発見と現存在の開示は、現存在が自分を自分自身から閉め切るために用いてきたさまざまな蔽塞や不明化の一掃として、さまざまな歪曲の打破という形でおこなわれるのが常である」(H. s. 129, 細谷訳)。

## ま と め

私が本稿で行ったことのひとつは、ガーフィンケルが1970年代の初めから、ハイデッガーの道具的存在性の議論に精通していたということである。すなわち彼は、逆転メガネと病気と障害をハイデッガー的なトラブルメーカーと名づけ、それを通して道具の透明性を克服し、人びとの状況に即した社会的慣習を明らかにしようとした。この点でガーフィンケルの企図はドレイファスが明らかにした、ウイトゲンシュタイン＝ハイデッガー的な「通常の行為の仕方によって端的に可能になる理解可能性」(Dreyfus, H. L., 2000a, 邦訳24頁)の水準にある。したがって、それはローカルな状況を離れた解釈や構築的な理論的観照を拒絶する。

ところがハイデッガーの「気遣い」という統一的把握を考えれば、ガーフィンケルとドレイファスの設定した端的な理解可能性とは、現存在の存在者＝「もの」に対する配慮に属する配視のはたらきであり、ハイデッガーが典型的な世人の支配と捉えた、現存在が他の現存在に対して取る日常的な顧慮については、両者はほとんど触れていないのである。ドレイファスのフロネーシスへの訴えも、ここではそれほど説得力を持たないだろう。

それではガーフィンケルはどうだろうか。ガーフィンケルはGarfinkel(2002)において、デュルケムの社会的事実「もの」であるというアフォリズムを、通常の社会学的解釈、つまり事物的存在性の水準で捉えることを批判し、それに代えてハイデッガー的な「もの」つまり道具的存在性の水準において「個性原理」を記述することを唱えた。しかしながら、世人に支配された顧慮の水準については、明示的な言及はない。その点ではむしろ、ガーフィンケルの弟子

たちの Goode (1994) と Robillard (1999) の病氣と障害のフィールドワークが、この問題について大きな示唆を与える。

前節で見たように、調査者がフィールドにおいて対象者との間主観性を達成しようとするれば、世人に支配された自己（調査者自身）を絶えず自己言及的に点検しなければならない。グッドが「自己点検」という言葉で明らかにしたことは、世人は調査者の知覚や感情をも強く呪縛しており、この世人の支配を緩めるためには、フィールドにおいて時間的に変化する自己を自己言及的に点検する以外に方法はないということである。ここからフィールドワークの経験に固有の知の様態が明らかになる。それはガーフィンケルとドレイファスが言う慣習的实践でも、端的に可能になる理解可能性でもない。むしろそれはローカルなコンテクストに調査者の身体を置くことで、対象者を巻き込んで展開し、変化していく間主観的な知と呼ぶのが適切だろう。私はこの間主観的な知を山田 (2011) では、理解に対する解釈と単純に呼んだが、むしろ調査者が身体を置く状況において、そのつどリヴァントになる、つまり関連性＝意味をもつようになる間主観性と呼ぶ方が適切である。そしてこれこそが、エスノメソドロジー的なフィールドワークの可能性を開いていくのではないだろうか。

## 注

1) 本稿は故ハロルド・ガーフィンケル (2011年4月逝去) と故宮沖宏 (2010年12月逝去) の二人に対する追悼論文である。追悼の意味を込めてガーフィンケルの思い出を話すと、1976年夏から1977年夏までの一年間、私は文部省交換留学生としてUCLAに留学し、当時57歳の彼の講義を受講した。その講義名はNormal Environmentであり、週2回、朝9時から2時間の授業だった。最前列にはガーフィンケルの大学院生たちが陣取る50名程度対象の講義だったが、受講生への注文はかなり厳しく、集中して受講させるために学生に講義中にノートを取るのを禁止するほどであった。また、違背実験等の実践レポートをかなり頻繁に課され、よく徹夜して仕上げたことを記憶している。また、故宮沖宏氏の仕事に対する真摯で献身的な態度は、常に私の模範であった。

また本稿は、2011年10月16日成城大学で開催されたEMCA研究会秋の研究例会「ガーフィンケル追悼シンポジウム」において「ガーフィンケルとハイデッガー」として報告したものをもとにしている。岡田光弘氏をはじめ、当日参加された方々の私の報告に対す

る貴重な批判的コメントに感謝する。

- 2) この *constructive* という表現は、現在の社会構築主義とはまったく関係がない。むしろこの表現はハイデッガーの『存在と時間』における *konstruktiv* と非常に類似した使い方をしている。つまりそれは、現存在の現象学的分析を放棄して、きわめてドグマ的に抽象的の思惟をめぐらすことを意味する。おそらくここにもハイデッガーのガーフィンケルに対する影響を読み取ることができる。特に『存在と時間』の第1部における *konstruktiv* の11回の使い方をそれぞれ確認すれば、ガーフィンケルの *constructive* の使い方とはほぼ同じであることが明らかになる。例として初出だけをアンダーラインで示し、その文脈を英語とドイツ語、それに邦訳（細谷貞雄訳）で挙げる。英訳では「ドグマ的な概念構成 (*dogmatic constructions*)」と構築的の部分の名詞になっているが、ドイツ語版の方がガーフィンケルの通常の使い方に近い。なお、ハイデッガーからの引用の仕方は、多くのハイデッガー研究者に習って、Max Niemeyer Verlag (1927) 版のドイツ語のページ数を示した。H はハイデッガーの略称で、s はドイツ語版頁、16 は具体的ページ数を示す。

H. s. 16 To put it negatively, we have no right to resort to dogmatic constructions and to apply just any idea of Being and actuality to this entity, no matter how 'self-evident' that idea may be; nor may any of the 'categories' which such an idea prescribes be forced upon Dasein without proper ontological consideration., John Macquarrie & Edward Robinson translated, *Being and Time*, Harpre & Row, 1962

Negativ gesprochen: es darf keine beliebige Idee von Sein und Wirklichkeit, und sei sie noch so «selbst verständlich», an dieses Seiende konstruktiv-dogmatisch herangebracht, keine aus einer solchen Idee vorgezeichneten «Kategorien» dürfen dem Dasein ontologisch unbesehen aufgezwungen werden.

否定的な言い方をすれば、存在や現実性についてのあり合わせの理念を、それがどれほど「自明」のものであろうとも、この存在者に構成的＝独断的に当てがってはならないし、かような理念を原型としてかたどられたいかなる「カテゴリー」をも、存在論的検査を経ずに現存在におしつけてはならない。(細谷訳)

- 3) ガーフィンケルは一体どの時点でハイデッガーの道具的存在性の議論をエスノメソドロジーに取り入れたのだろうか。ガーフィンケルとポルナー (Pollner, M.) に指導された Goode, D. (2003) によれば、彼が1970年代の大学院生の頃、ガーフィンケルは逆転メガネと同様、病と障害によるハイデッガー的トラブルメーカーを授業に導入していたようだ。また、彼と同時期の大学院生である Robillard, A. の最初の研究テーマは、ハイデッガーとエスノメソドロジーであったという。病と障害と身体への注目は、もちろんメルロ＝ポンティの研究も同時に促したようだが、1970年代初めがハイデッガー導入の時期と見て

まちがいないだろう。

また Goode, D. (1994) の第 5 章において、ガーフィンケルの授業中の宿題として、電話の呼び鈴の研究が出されたことを詳しく説明している。学生たちは最初この実験の目的を理解することができず、驚いたが、呼び鈴を録音するという方法を通して、電話が私にかかってきているという生きられた秩序現象が消えてしまうことに気づいたという。

- 4) この引用の原文を示す。These (concerted skills of “equipmentally affiliated” shop work and shoptalk ※前の文章から文意を取って筆者が補充した) are respecified Ethnologically with “Heideggerian uses” of handicaps, illnesses, disability, their affiliated equipmental “aids to independent living,” as well as with inverting lenses and other bodily, characterological, organizational, and procedural “troublemakers.”
- 5) 急逝した門脇俊介 (2008) と (2010) を参照した。また、吉田恵吾 (2011) も参考になった。Benner, P. & J., Wrubel (1989) もドレイファスのハイデッガー解釈の発展形の一つと見なすことができる。ドレイファスは石原 (2002) によれば、状況的行為論で名高い L. サッチマンの博士論文の審査員でもあったという。ここにもエスノメソドロジーとドレイファスのハイデッガー論の近さを認めることができる。この点で、ハイデッガーの道具的存在性を積極的にコンピューター科学に取り入れたウイノグラードの研究とエスノメソドロジーとの関係を詳細に明らかにした先駆的研究として水川 (1995) を参照せよ。
- 6) この要約は、以下の英語翻訳にもとづいた。細谷貞雄訳では配視についてここで示した解釈が英訳ほどうまくでてこない。

H. s. 69 If we look at Things just “theoretically”, we can get along without understanding readiness-to-hand. (Zuhandenheit) But when we deal with them by using them and manipulating them, this activity is not a blind one; it has its own kind of sight, by which our manipulation is guided and from which it acquires its specific Thingly character. Dealings with equipment subordinate themselves to the manifold assignments of the “in order to”. And the sight with which they thus accommodate themselves is circumspection (Umsicht=配視).

- 7) 例えば以下の引用を見よ。「覚知 (Vernehmen) され規定されたものは命題において言明され、このように言明された言葉として記憶され保存されることができる。しかし、このようになにかについての言明を覚知的に記憶していることも、それ自身は世界内存在の一種態であるから、それを主観がなにかについての表象を入手するための「心的過程」と解釈したり、それによって取得された表象は「内面」に保管されていて、それらについていつか折りにふれて、それらがどうして現実と「一致する」のかという問いが発生する、などと考えたりすることは許されない」(H. s. 62=細谷訳, 148 頁)。

つまり、現存在は内から外に出て行くわけではなく「いつもすでに発見されている世界において出会ってくる存在者のもとに、いつもすでに「立ち出ている」のである」(H. s. 62=細谷訳 149 頁)。すでに門脇 (2010) が指摘しているように、この表象批判はライル自身のハイデッガー評に反して、彼の『心の概念』(Ryle, G., 1949=1987) における「機械

の中の幽霊」の心身二元論批判と非常に近い。

- 8) この日本語版への序文は、ほぼ Dreyfus, H. L. (2000b) に対応している。
- 9) Robillard., A., 1999 年の著作と Goode., D., 1994 年の著作の下訳を提供して下さったのは、神戸大学の榎村志郎氏である。ここに記して感謝の意を表したい。この引用はその下訳をもとに改訳したものである。
- 10) グッドは間主観性について、自分がクリスと同じ世界に属していることを、彼女と自分が相互に認識すること (p.24) と言い換えている。これはまさに他の現存在と共同現存在であるということの意味するだろう。そして共同現存在＝間主観性を達成するためには、類型化された世人を乗り越えるための「蔽塞や不明化の一掃」と「歪曲の打破」が必要なのである。このことは薬害エイズ調査において、私たちがメディアも含めた世人的な類型化をフィールドワークの経験を通して乗り越えていくプロセスと共通している。(山田, 2011) その意味で、フィールドワークの経験とは、世人の支配との絶え間ない闘いとも言うことができよう。

#### 引用文献

- Benner, P. & J., Wrubel, 1989, *The Primacy of Caring*, Addison-Wesley Pub., 難波卓志訳, 1999, 『現象学的人間学と看護』医学書院
- Dreyfus, H. L., 1991, *Being-in-the-World*, 1991, MIT Press., 2000a, 門脇俊介, 貫成人, 轟孝夫, 榎原哲也, 森一郎訳, 『世界内存在』産業図書
- Dreyfus, H. L., 2000a, 「日本語版への序文」, 門脇俊介, 貫成人, 轟孝夫, 榎原哲也, 森一郎訳, 『世界内存在』産業図書
- Dreyfus, H. L., 2000b, Could anything be more Intelligible than Everyday Intelligibility? : Reinterpreting Division I of Being and Time in the light of Division II, in J. E. Faulcouner & M. A. Wrathall eds, *Appropriating Heidegger*, Cambridge U. P.
- Garfinkel, H., and D. L. Wieder, 1992, “Two Incommensurable, Asymmetrically Alternate Technologies of Social Analysis” in Watson, G., and Seiler, R. M.(eds.) *Text in Context ; Contributions to Ethnomethodology*, Sage, pp. 175-206.
- Garfinkel, H., 1996, Ethnomethodology’s Program, *Social Psychology Quarterly*, Vol. 59. No. 1, 5-21.
- Garfinkel, H., 2002, edited by A. Rawls., *Ethnomethodology’s Program : Working Out Durkheim’s Aphorism*, Rowman & Littlefield
- Goode, D., 1994, *A World Without Words*, Temple University Press
- Goode, D., 2003, Book Review : Ethnomethodology and Disability Studies : A Reflection on Robillard, *Human Studies* 26 : 493-503.
- Heidegger, M., 1927, *Sein und Zeit*, Max Niemeyer Verlag
- Heidegger, M., 1962, *Being and Time*, John Macquarrie & Edward Robinson (translated), Harper

- & Row=ハイデッガー『存在と時間』1963, 細谷貞雄訳 理想社
- Husserl, E., *Die Krisis der europäischen Wissenschaften und der transzendente Phänomenologie*, 1936. In *Husserliana* Bd. 6. M. Nijhoff, 1954=細谷恒夫/木田元訳『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』中央公論社
- 石原孝二, 2002, 「認知科学における状況論的アプローチとハイデッガー」『哲学年報』49号, 17-30頁
- 門脇俊介, 2008, 『『存在と時間』の哲学』産業図書
- 門脇俊介, 2010, 『破壊と構築—ハイデッガー哲学の二つの位相』東京大学出版会
- 水川喜文, 1995, 「合理主義・工学的発想・協同作業—ウイノグラードらの認知科学的アプローチとガーフィンケルの接点—」『社会学論考』16号, 106-127頁
- Ryle, G., 1949, *The concept of mind.*, Hutchinston=『心の概念』1987, 坂本百大・宮下治子・服部裕幸訳, みすず書房
- Robillard, A. B., 1999, *Meaning of a Disability: The Lived Experience of Paralysis*, Temple University Press
- 桜井厚, 2002, 『インタビューの社会学』せりか書房
- 山田富秋, 2001, 『日常性批判』せりか書房
- 山田富秋, 2011, 『フィールドワークのアボリア』せりか書房
- 吉田恵吾, 2011, 「門脇俊介とドレイファスはどこで分かれたか」『共生の現代哲学』18, UTCP